The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	傷つきやすさの現象学
Author(s)	浜渦, 辰二
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77129
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

あとがき

浜渦　辰二

本書のもととなった共同研究「北欧現象学者たちとの共同研究に基づく傷つきやすさと有限性の現象学」のきっかけとなったのは、本書「まえがき」で名前を挙げた４人の女性北欧現象学者たちのうち、とりわけ Sara Heinämaa 教授と、私が１週間フィンランド・ヘルシンキに滞在するあいだ、長時間ではないが４日お会いして、お互いのこれまでの関心や研究について意見交換をして意気投合したことであった。

研究分担者になっていた科学研究費・基盤研究（Ｂ）（海外学術調査）「世俗化する欧州社会における看取りの思想的な拠り所の究明」（代表 : 竹之内裕文・静岡大学）の補助により、2013 年８月 27 日から９月２日までヘルシンキでホスピスを訪問見学し、ホスピス調査をしている研究者から話を伺うこと、あわせてヘルシンキ大学の以前から交流のあった研究者と意見交換をし、続けて９月３日から 10 日まで英国・ミルトンキーンズで開催された学会に参加して、「世俗化する欧州社会における看取り」の調査をすることが、目的であった。いったん帰国ののち、９月 25 日〜30 日には、ドイツ・ケルン大学で国際学会での研究発表 “Caring und Phänomenologie - Aus der Sicht von Husserls Phänomenologie der Intersubjektivität”（ケアと現象学―フッサール間主観性の視点から）をしたのち、ボッフムで「公益法人　文化を配慮した介護 DeJak 友の会」の代表者と打ち合わせを行い、10 月１日〜12 月 31 日の３ヶ月間、ドイツ・ハイデルベルク大学日本学研究所で大阪大学文学研究科との交流協定に基づく交換講師としてゼミナール“Von Geburt, Alter, Krankheit und Tod in der modernen Gesellschaft Japans”（現代日本社会における生老病死について）を担当しながら、空き日程を利用して、『奇跡の医療・福祉の町　ベーテル　心の豊かさを求めて』（西村書店、2009 年）で紹介されているビーレフェルト近郊の町ベーテルを訪ね、また、グループホームで暮らす成人したダウン症の息子を離れて見守りながら老後を過ごしている『小さなよろこび　大きな幸せ』（知泉書館、2012 年）の著者・横井秀治さん夫婦を、チュービンゲンに訪ねた。慌ただしく飛び回った４ヶ月ほどであった。

この時、上記のヘルシンキ大学でお会いした研究者が Sara Heinämaa 教授だった。フィンランド・ユヴェスキュラ大学（社会科学・哲学部教授）とヘルシンキ大学（主観性・歴史性・共同性研究コミュニティ所長）を兼任している。2007〜2014 年の間、北欧現象学会の会長を務めたほか、多くの国際ジャーナルの編者や審査員を務め、多くの国際的な著者の論考を集めた論文集の編者を務め、多くの博士論文のスーパーバイザとして後継研究者を育ててきて、北欧現象学なかでもフェミニスト現象学の牽引役となっている女性研究者である。2009 年にフィンランド・タンペレで開催された北欧現象学会に私が参加し、発表“Narrative and Perspective”を行った際に、少し意見交換をしたことがあり、今回ヘルシンキのホスピス訪問とホスピス研究者への紹介の労を取っていただいた。そのなかで、彼女の研究がボーヴォワール『第二の性』の読み直し（*Toward a Phenomenology of Sexual Difference: Husserl, Merleau-Ponty, Beauvoir*, 2012）から始まり、「妊娠／出産」の問題から、「老い／死」の問題へと進んできて、いまそれらを「人間存在のメタモルフォーゼ」としてまとめようとしていると聞き、私がこの間、「生老病死とそのケアの現象学」というテーマで考えてきているこ

とをお話しし、それぞれ異なる関心から出発しながら、現在の関心を共有していることをお互いに感じとった。ここで、フェミニズム現象学からのアプローチとケアの現象学・臨床哲学からのアプローチが出会ったのである。

ヘルシンキでは、他にも、彼女から紹介されて、二人の研究者と話をすることができた。１人は、ヘルシンキ大学の比較宗教学の研究者で、もともと、身体の現象学から出発して死にゆく人のケアをホスピスでの聞き取り調査に基づいて研究をしていた人で、いまは「魔術と日常的現実」という観点から、ケアの新しい（スピリチュアルな）実践を研究している、とのことだった。もう１人は、その弟子で、同じヘルシンキ大学、比較宗教学の院生で、その研究を継いで、ヘルシンキのホスピスで聞き取り調査に基づいて、現在博士論文「緩和ケアにおける希望、必要、儀式活動」を執筆中とのことだった。さらに、Irina Poleschuk 博士とともに、フェミニズム研究の小さな集まりに連れて行っていただいた。

また、ヘルシンキ唯一のホスピス“Terhokoti” の所長（1993 年以来。ホスピス医・政治学 BA）である Juha Hänninen 氏を、Heinämaa 教授とともに訪ね、共同でインタヴューを行うことができた。ちょうどその前日に、ヘルシンキ市内発行の大衆紙（yellow papers）に、５面にわたって同ホスピスの紹介と同氏へのインタヴューの記事「美しい死の家」が掲載されていたので、それを踏まえてその先の話を尋ねることができた。大衆紙なので、その内容は決して突っ込んだレベルのものではないが、大衆紙にそのような記事が５面にわたって沢山の写真とともに掲載されること自体が、（少なくともヘルシンキでは）希有なことで、それだけホスピスがヘルシンキ市民にも浸透してきていることの現れとも言える。

上記のように、私はその後ヘルシンキを後にして英国ミルトンキーンズに向かった。国際学会“Death, Dying and Disposal (DDD) , 11 International conference – Where theory meets practice” に参加、シンポジウムといろいろな研究発表を聞き、火葬場（crematorium）の見学ツアーにも参加した。“Death, Dying”はともかく、 “Disposal”という言葉遣いには驚いた（日本では「ごみ処理」の意で使われることが多い？）。土葬か火葬かというのも、“Disposal”（遺体処理）の問題であるようだ。現代日本ではほとんどが火葬になっているが、欧州の火葬というのは馴染みがなかった。帰国してから、鯖田豊之『火葬の文化』（1990）を読んで、欧州のなかでも英国は火葬率が高く、「簡略化されすぎた火葬」として「イギリス式火葬」（アリエス）という用語が使われることを学んだ（同書では欧州一位と紹介）。国際火葬連合 ICF によると、「2010 年の日本の火葬率は 99.94%で世界一。ついで、台湾 90.04%、香港 89.00、スイス 85.18%、チェコ 80.87%、タイ 80.00%、シンガポール 77.82%、デンマーク 77.34%、スウェーデン 76.86%、英国 73.15%と続く」という（日本環境斎苑協会）。２つの Panel Session、６つの Plenary Session、多数の Parallel Session、２つの Exhibition、１つの Musical Entertainment、２つの Excursion と盛り沢山だった。Parallel Session のテーマ “End-of-Life Care”を中心に聞いた時に学んだことについては、旧稿「尊厳死を法制化するとは、何をすることなのか？―日本とヨーロッパ三国の比較考察―」（拙著『ケアの臨床哲学への道』晃洋書房、2019 年所収）で簡単に報告した。

さて、ところが、ミルトンキーンズに到着するやいなや、それを追いかけるようにして、Heinämaa 教授からのメールが飛び込んできた。それは、私と彼女の関心の共有するところで、“Phenomenological Analysis of Care: On Birth, Aging, Sickness and Death”というテーマで、日本・フィンランド二国間共同研究を申請しようという提案だった。これは両国の学術振興

会に同時に申請しなければならず、しかも締切は一週間後だというので、お互いに内容をメールで調整しあいながら、私は上記の学会に参加しながら、空き時間を利用して、申請書を作成し、ミルトンキーンズを離れる前に申請まで漕ぎ着けることができた。しかし、共同研究の実績もまだほとんどなく、準備期間も不十分で、残念ながら、それは不採択となった。

せっかく Heinämaa 教授との共同研究の話が盛り上がったのを何とか活かしていきたいと考え、再度学術振興会に申請するためにも共同研究の実績を積む必要があると考えて、2014 年度の大阪大学の国際共同研究促進プログラム（短期人件費支援）のプログラムに申請・採択されて、翌 2015 年 3 月には、彼女を招聘して、講演会“Transformations of Old Age: Selfhood, Normativity, and Time”を行い、翌日から、「フェミニスト現象学」と「現象学の多様性」と題する二日間のオープンセミナーを行い、日本の若手の研究者達の発表を聞いていただき、コメントをいただくことができた。また、同年５月には Heinämaa 教授のもと、博士論文“Temporality of the Face-to-Face in Levinas' Ethics”にて博士号を取得した Irina Poleschuk 博士（ヘルシンキ大学ポスドク研究員、リトアニア・ヴィルニュス・ヨーロッパ人文大学講師）を招聘し、公開セミナー「フェミニスト現象学に関する研究」を開催することができた。

さらに、同年 9 月にはこちらからヘルシンキ大学を訪ねて、Heinämaa 教授がオーガナイズしてくれた学際的ワークショップ “Dialogue and Intersujbectivity”（対話と間主観性）にて、同教授のユヴェスキュラ大学の同僚で、いまでは「オープンダイアローグ」の第一人者として日本でも有名になった Jaakko Seikkula 教授の基調講演「身体をもった活動としての精神療法」の後に、私も基調講演「フッサール現象学と精神医学における対話」を行う機会を与えていただいた。日本からは、本書執筆者でもある稲原美苗助教と大学院生の川崎唯史さん（それぞれ当時の身分）も参加、ともに発表の機会を得て、ヘルシンキ大学およびユヴェスキュラ大学と大阪大学との交流にもなり、これからの共同研究にも弾みとなった。また、翌日には、同じく Heinämaa 教授のオーガナイズにより、ヘルシンキ大学哲学研究室のセミナーにて講演“Intersubjectivity of Ageing - Reading Beauvoir's The Coming of Age”をする機会を与えられた。これは、ヘイナマー教授の論文“Transformations of Old Age: Selfhood, Normativity, and Time”が、ボーヴォワール『老い』を論じたのに対するリプライとして、私なりにボーヴォワール『老い』についての考察を行ったものである。

これらの実績を踏まえて、大阪大学の国際合同会議開催の支援に申請・採択され、2016 年３月には３日間にわたって、フィンランドから Heinämaa 教授と Irina Poleschuk 博士を含む若手の研究者４名とを招聘して、国内からも若手研究者７名を招き、阪大の院生３人も加わって、日本フィンランド共同研究・国際シンポジウム“Phenomenology of Vulnerability and Limitation”（傷つきやすさと限界の現象学）を開催することができた。このようにして築いてきた共同研究の活動実績が認められ、本書のもととなった科学研究費・基盤研究(B)（一般）に基づく共同研究「北欧現象学者との共同研究に基づく傷つきやすさと有限性の現象学」（2016 年度～2018 年度）が採択されて、「まえがき」で紹介したように、新たな共同研究が３年間行われたのであった。

「まえがき」でも触れたように、2018 年８月北京で開催された第 24 回世界哲学会議では、前述の Irina Poleschuk 博士が中心になってラウンドテーブル“The Phenomenology of Vulnerability: Birth, Aging, and Death”を行った。また、その後、彼女はもともとベラルーシ出身で、ベラルーシとリトアニアの両国をまたいで運営されている European Humanities

University（ヨーロッパ人文大学）を卒業後、ヘルシンキ大学で Heinämaa 教授の指導を受けたレヴィナス研究者であるが、彼女の紹介でかつての師である女性現象学者 Tatiana Shchyttsova 教授（ヨーロッパ人文大学、著書に *Jenseits der Unbezüglichkeit, Geborgensein und Intergenerative Erfahrung*, Orbis Phenomenologicus, Königshausen&Neuman, 2016 などがある。関心分野は間主観性の現象学、実存主義人間学、世代間関係など）のオーガナイズでミンスク（ベラルーシ）の同大学で講演をする機会を与えていただき、さらにそこにサンクト・ペテルブルク（ロシア）から参加していた同教授の共同研究者から後に招待いただき、2019 年３月にはサンクト・ペテルブルク大学で講演をする機会を与えていただいた。

このように、私たちの共同研究は、北欧現象学者たちという枠を超えて広がるとともに、すっかり新しい世代が中心になって運営されるようになってきた。「まえがき」で触れた『フェミニスト現象学』の出版は、すでにバトンは私の手から彼らの世代に渡ったことを象徴しており、私の役割は果たせたことを確認しつつ筆を置くことにする。

執筆者一覧（執筆者順）

浜渦　辰二：上智大学グリーフケア研究所・特任教授、大阪大学・名誉教授（第１章）

川崎　唯史：熊本大学大学院生命科学研究部・助教（第２章）

中　真生：神戸大学大学院文学研究科・准教授（第３章）

小手川　正二郎：國學院大學文学部・准教授（第４章）

永浜　明子：立命館大学スポーツ健康科学部・准教授（第５章）

古怒田　望人：大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程・大学院生（第６章）